

阿富汗事件  
「バミール」問題

斯坦の全部を征服せり。阿富汗人は、露國の後援を恃みて、屢英國に叛きければ、英露の衝突、殆ど避くべからざるに至りしが、光緒十一年（皇紀二五〇五年）兩國商議して、阿富汗の北境を確定し、争根こゝに絶えたり。又其東境は、英露清三國に關聯し、「バミール」問題と稱して、久しく決せざりしが、光緒二十二年に至りて、姑く其局を結へり。

### 第九節 後印度諸國 清佛戰爭

**安南事件** 清の今上帝の世には、伊犁問題に續きて、佛國との戰爭あり。事は安南に關せり。今序を以て、後印度諸國の事蹟を尋ねん。

緬甸

**緬甸** 緬甸は、嘗て元の世祖の征伐を受けし以來、代々の國王、大抵封を元明より受けしが、明末に至り、内亂のため、國

阿瓦國

土分裂し、就中白古國最大なりしが、後阿瓦國強盛となりて、全土を併せ、乾隆中清の領内を侵し、高宗の征伐にあひて、和を請へり。されど國勢更に衰へずして、東隣なる暹羅國を滅ぼしたり。但し幾もなく、暹羅は叛き去りぬ。其後道光中、緬王は英人と争端を開き、敗北して西境を奪はれ、咸豐中再び英人と戦ひて、益其境域を縮められ、光緒十一年三たび英人と戦ひ、王擒となりて、國亡び、緬甸全土悉く英に歸したり。

暹羅

**暹羅** 暹羅は、古來久しく東洋史上に著しき關係を有せざりしが、明に至り、太祖の封爵を受けたる事あり。此後支那との關係甚疎なりしか、日本人の移住するもの漸く多く、明末には、日本人山田長政といふもの、武功を立て、大に國王の信任を受けし事あり。されど爾來國勢漸く振はず、乾隆中緬甸の爲に滅ぼされしが、幾もなく鄭昭といふもの、緬甸人

山田長政は駿河の商人にのりて、元和の頃暹羅に渡航せり。

英國緬甸を併す

後印度唯一の獨立國

を逐ひて、自立し、都を盤谷バンコクに定め、其弟華之に代り、乾隆帝より暹羅國王に封ぜられぬ。後道光年間、東隣なる安南と戦ひて、地を東南に拓き、咸豐以後大に改進の國是を定めて、汎く世界列國と好を修めたり。實に後印度に於ける方今唯一の獨立國なり。

黎利

安南は、明の成祖以來、支那の屬領たりしが、明の宣宗の時、黎利といふ者起り、自立して、東京に都し、大越皇帝と號せり。黎氏の朝に、占城亡びて、大越の版圖に入りぬ。其後明の世宗の頃、權臣莫氏は、黎氏を逐ひて、帝位を篡ひしが、尋いで阮氏といふもの、黎氏を奉じて、南方に起り、安南二分して、相争へり。明の末葉に至り、莫氏全く亡び、越王黎氏は、清に朝して、安南王の封を受けたり。然るに阮氏また南に叛き、順化に都して、廣南王と稱しければ、安南再び分裂せり。廣南は眞臘

阮福映

安南の一統

佛國と安南

(東蒲塞)を略し一時勢力盛なりしが、後内亂起り、阮文岳といふもの自立して、交趾王となり、王族阮福映逃れて、暹羅に入り、文岳の弟に、阮文惠といふものあり、越王黎氏を斃して、自ら東京王と稱し、乾隆帝の征伐を受けて、清に内附せり。文惠の子阮弘瑞、東京王たるに及び、交趾王文岳を攻め殺して、其地を併せたりしが、此時阮福映は、佛國人の力を籍り、下交趾を定めて、柴棍チャイコックに據り、更に北侵して、順化に都し、尋いで東京を陥れ、弘瑞を攻め殺して、全土を一統し、乾隆帝より封を受けて、越南王となれり。是れ即ち安南現王室の祖なり。此の如く安南は、一王の下に歸したりしが、國勢更に振はず。道光年中には、暹羅と戦ひて、西境を失ひたる上、佛國と葛藤を生じて、遂に南方三州を讓與せり。後往々佛國との間に小衝突ありしが、同治の末年に至り、又戦端を開くこととなれ

「クール  
ペー」

り時に髮賊の殘黨に、劉永福といふものあり。黒旗軍と稱する軍隊を組織し、安南を援けて、大に佛軍を破りしかば、佛將「クールペー」直に艦隊を率ゐ來りて、東京地方を占領し、越南王の和を請ふに及び、其國を舉げて、佛國の保護國としたり、時に光緒九年なり、

諒山鎮臺

清佛の戦争 然るに清國は、越南を以て其藩邦となし、佛國駐在公使曾紀澤をして、抗議せしめしかば、佛國固く執りて應ぜざりしかば、清廷遂に歩を譲りて、安南に於ける權利を抛棄せり。佛軍乃ち進みて、諒山鎮臺を占有せんこせしに、清の守兵之を拒みて逆撃し、平和こゝに破れて、開戦となれり。是に於て佛將「クールペー」は、艦隊を率ゐて、福州の海上に顯はれ、清の軍艦を撃沈して、臺灣の諸港を封鎖し、澎湖島を占領せり。同時に其陸軍は、諒山を取り、進んで廣西の地に入れ

清佛和成

り。然れども臺灣の守將劉銘傳、善く戦ひて、鷓籠港を復し、廣西提督馮士材、亦奮戦して、諒山を復したり。時に佛國內閣に交渉ありて、廟議一變し、天津に於て平和條約訂結せられ、越南の主權は、依然佛國に屬する事となれり。(光緒十一年)

### 第十節 日清韓三國の關係 日清戦争

朝鮮清に  
降る

朝鮮と支那 元來朝鮮は、明と國交親密にして、滿清の起るに及びても、尙ほ心を明に寄せて、容易に清朝に服せざりしが、太宗の爲めに伐たれて、遂に降を請ひ、屬國の禮を執るに至れり。

佛米の江  
華島砲撃

大院君 今王李熙即位の後、其父大院君李昰應、政を攝し、痛く歐米人を憎みて、佛國宣教師數人を殺し、かば、佛國軍艦來りて、江華島を砲撃せり。後米國人亦砲撃の難にあひしか

征韓論

ば、米艦來りて、江華島の砲臺を陥れ、以て其怨に報ぜり。是れ實に清朝同治年中の事なりき。

朝鮮と日本 朝鮮と日本の國交は、徳川幕府の時代に使聘相通せしが、明治政府の世となり、修好の使者日本より來れども、大院君斷然峻拒して、之に應ぜざりき。日本にて征韓論の起りしは、正に此時なり。かくて日本軍艦、江華島に砲撃せらるゝに及び、光緒二年日本黒田清隆來りて、其罪を問ひしかば、朝鮮政府は之を謝して、始めて修好條約を結び、尋いで歐米各國とも好を修めたり。

其後大院君は、王妃閔氏と合はずして、引退せしが、光緒八年窃に京城の衛兵を煽動し、俄に閔氏の第を襲はしめたり。此時日本公使館亦亂民の襲撃にあひければ、日本政府は、井上馨を遣して、詰問せしめ、償金五十五萬圓を徴したり。是れよ

朝鮮の二政黨

二黨の衝突

り日本は、公使館護衛の爲に兵を京城に置き、同時に清國亦兵を派して、京城に駐屯せしめたり。爾來朝鮮の政界、二派に別れ、一は事大黨と稱して、清國に依頼し、一は獨立黨と稱して、日本の同情を求め、以て相軋れり。然るに事大黨は、清將袁世凱と相結びて、政權を專にせしかば、獨立黨の首領、金玉均、朴泳孝等、遂に亂を作し、事大黨の首領、閔泳翊等を殺し、國王を擁して、援を日本公使に求めたり。因りて竹添公使は、兵を率ゐ、入りて王宮を守りしに、袁世凱は、事大黨を助けて、日本兵を逐ひ、且日本公使館を焼夷せり。是に於て日本は、井上馨を朝鮮に遣して、償金十三萬圓を出さしめ、又伊藤博文を清國に遣して、李鴻章と會議せしめ、其天津條約に於て、兩國共に朝鮮駐在兵を撤する事、及び他日必要ありて兵を出す場合には、互に相通告すべき事等を定めたり。時に光緒十一年

天津條約

東學黨の亂

なり。

豊島海上の戦

日清戦争 光緒二十年に至り、東學黨と稱する亂民、朝鮮に起り、勢猖獗にして、韓廷之を平ぐること能はざりし際、清國は天津條約に違反して、擅に兵を朝鮮に出せり。是に於て日本亦同じく兵を出して、京城に入らしめ、且日清協力して、韓國の改革を圖らん。せしに、清國更に應ぜず。兩國の關係、方に切迫し來りしが、豊島海上に於て、彼我軍艦の間に、端なくも一場の砲戦を開きて、兩國の平和全く破れたり。

かくて日本大將山縣有朋は、第一軍を率ゐ、清兵を追うて、其要害と恃める平壤城を抜き、同時に海軍の將伊東祐亨は、清の艦隊を黃海に撃破して、威海衛に退嬰せしめたり。尋いで第二軍の將大山巖は、金州半島に上陸し、旅順口を陥れ、第一軍亦遼東の諸城を降し、二軍合して牛莊、田庄台を破り、又別

北洋水師殲く

日清の和議成る

露獨佛の同盟

軍は南方澎湖島を略し、且威海衛を抜き、北洋水師を粉齏しければ、清國力屈して、和を請ひ、日清兩國使臣談判の末、清は朝鮮に於ける權利を抛棄し、償金二億兩を出し、遼東半島及び臺灣、澎湖島を割讓し、且沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を開くこととなり、和議ここに調へり。

然るに露獨佛三國は、遼東割讓を以て、東洋の平和を維持する所以に非ざりし、日本に勸告する所ありしかば、日本は其言を納れ、更に五千萬兩の償金を收めて、遼東半島を清に還附したり。

第十一節 日清戦争後の東洋

歐洲諸強國の東方經略 日清の役以來、日本の國威世界に

發揚せると同時に、清國は衰弱無力の狀を表白しければ、歐

膠州灣旅順口等の借用

洲諸強國は、之に乗じて東洋の方面に、各自の利益を擴張せんと相競ふに至りぬ。かくて獨逸は、まづ清國に迫りて、九十九年間膠州灣借用の權を得たりしかば、續いて露國は、二十五年間（尙ほ契約によりて、期限を延長することを得）旅順口、大連灣の借用を要求し、英國も亦露國と同年期間、威海衛の借用を強請して、各其目的を達し、其後佛國は、廣州灣の借用を清國に要求して、其同意を得たり。是に於てか東洋の天地は、將來益多事となるべき兆候を現しぬ。

康有爲

清國朝鮮等の近狀 清國にては、康有爲の徒、國事の日に非なるを慨し、舊來の陋習を破り、一國の文明を進めんとして、大に改革論を唱へしかば、反對黨の勢力盛にして、康有爲は遂に國外に遁逃せざるべからざるに至り、改革の業頓挫せり。又朝鮮にては、露國一旦大に内政に干渉を試みしかば、其後

東洋の大勢

西比利亞鐵道

漸く退讓するに至れり。朝鮮の近狀は、要するに黨争のみ、變亂のみ、其他の諸國に於ては、特に記すべき要件なし。  
東洋の大勢、西比利亞鐵道 今や亞細亞大陸は、北方に露國あり、中央亞細亞及び西比利亞を掩有して、猛勢を張れり。南方に英國あり、前後印度及び諸處の要樞を占めて、權力を振へり。清國朝鮮等萎靡して、爲すことある能はず、世界列強の視線、實に東洋に集中せり。  
特に東洋の將來に大關係あるべきものは、西比利亞鐵道なり。こは露國の大事業にして、鐵道の延長凡そ四千哩に亘るの計畫なり。其西端を「チエリヤビンスク」とし、東端を浦鹽斯德とす。而して、バイカル湖以西、凡そ二千七百哩の工事は、既に竣工せりと聞く。今より凡そ六年を期して、この鐵道全部開通の豫定なれば、其上は東洋の政治上商業上に、鮮からざ



る影響を及ぼすことなるべし。

新編 東洋史教科書 終

重要事蹟年表

後光明天皇	後西院天皇	元	天	皇	東山天皇	中御門天皇	櫻町天皇	後櫻町天皇	光格天皇
二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二
一三	一九	三三	四三	四五	四九	五六	一五	二七	六三
世清祖	上同	上同	上同	上同	上同	上同	高宗	上同	仁宗
波斯に「アバヌ」王出づ	印度の「オーラングゼブ」帝立つ	明室全く亡ぶ	三藩の亂起る	臺灣清領に歸す	聖祖「コサック」兵を撃退す	尼布楚の條約	聖祖「喀爾丹」を征す	西藏清に従ふ	準噶爾部清に従ふ
							同部全く清に従ふ	鄭昭暹羅を再興す	阮福映安南を統一し越南國を建つ



仁孝天皇	孝明天皇	孝明天皇	今	上	天	皇
二四九九	二五一〇	二五一六	二五二二	二五二四	二五三三	二五三四
宣宗	上同	文宗	上同	上同	上同	上同
鴉片問題起る	長髮賊の亂起る	清英佛と葛藤を生ず	愛琿條約 印度全く英國女皇の直轄となる	朝鮮王李熙立つ	長髮賊の亂平定す	日本臺灣を征す
			日韓條約成る	伊豫問題定まる	安南佛國の保護國となる	日清天津條約成る 阿富汗事件定まる
			緬甸全く英領に歸す	朝鮮東學黨の亂起る 日清戦争	馬關條約成る 「バミール」問題定まる	獨逸膠州灣借用の權を得

新編 東洋史教科書附録

支那歴代世系

- 三皇 伏羲 神農 黃帝
- 五帝 少昊 顓頊 帝嚳 唐堯 虞舜
- 夏 姒姓 十七世四百五十八年
  - 一、大禹 二、帝啓 三、太康 四、仲康 五、帝相
  - 六、少康 七、帝杼 八、帝槐 九、帝芒 十、帝泄
  - 十一、帝不降 十二、帝局 十三、帝廑 十四、帝孔甲 十五、帝皐
  - 十六、帝發 十七、履癸(桀)
- 殷 子姓 二十八世六百四十四年
  - 一、成湯 二、太甲 三、沃丁 四、太庚 五、小甲
  - 六、雍己 七、太戊 八、仲丁 九、外壬 十、河亶甲
  - 十一、祖乙 十二、祖辛 十三、沃甲 十四、祖丁 十五、南庚

十六、陽甲	十七、盤庚	十八、小辛	十九、小乙	二十、武丁
二一、祖庚	二二、祖甲	二三、廩辛	二四、庚丁	二五、武乙
二六、太丁	二七、帝乙	二八、帝辛(紂)		
周 姬姓 三十七世八百四十二年				
一、武王	二、成王	三、康王	四、昭王	五、穆王
六、共王	七、懿王	八、孝王	九、夷王	十、厲王
十一、宣王	十二、幽王	十三、平王	十四、桓王	十五、莊王
十六、僖王	十七、惠王	十八、襄王	十九、頃王	二十、匡王
二一、定王	二二、簡王	二三、靈王	二四、景王	二五、悼王
二六、敬王	二七、元王	二八、貞定王	二九、哀王	三十、思王
三一、考王	三二、威烈王	三三、安王	三四、烈王	三五、顯王
三六、慎靚王	三七、赧王			
秦 嬴姓 三世十五年				
一、始皇帝	二、二世皇帝	三、三世子嬰		
漢 劉氏 前漢十二世二百九年				

一、高祖邦	二、惠帝	三、文帝	四、景帝	五、武帝
六、昭帝	七、宣帝	八、元帝	九、成帝	十、哀帝
十一、平帝	十二、孺子嬰			
後漢 十二世 百九十七年				
一、光武帝秀	二、明帝	三、章帝	四、和帝	五、殤帝
六、安帝	七、順帝	八、冲帝	九、質帝	十、桓帝
十一、靈帝	十二、獻帝			
三國				
魏 曹氏 五世四十六年				
一、文帝丕	二、明帝			
三、帝芳	四、帝懿			
五、元帝				
蜀 劉氏 二世四十四年				
一、昭烈帝備	二、後主禪			
吳 孫氏 四世五十二年				
一、太帝權	二、帝亮			
三、景帝	四、帝皓			
晉 司馬氏 西晉四世五十二年				
一、武帝炎	二、惠帝	三、懷帝	四、愍帝	
東晉 十一世 百十四年				

- 一、元帝 恭
- 二、明帝
- 三、成帝
- 四、康帝
- 五、穆帝
- 六、哀帝
- 七、帝奕
- 八、簡文帝
- 九、孝武帝
- 十、安帝
- 十一、恭帝

南朝

劉氏 八世六十年

- 一、武帝 裕
- 二、帝義符
- 三、文帝

- 四、孝武帝
- 五、帝子業
- 六、明帝

- 七、帝昱
- 八、順帝

蕭氏 七世二十四年

- 一、高帝 道
- 二、武帝
- 三、帝昭業

- 四、帝昭文
- 五、明帝
- 六、帝寶卷

- 七、和帝

蕭氏 四世五十六年

- 一、武帝 衍
- 二、簡文帝
- 三、元帝

- 四、敬帝

北朝

拓跋氏 後元氏 九世百四十五年

- 一、道武帝 珽
- 二、明元帝
- 三、太武帝

- 四、文成帝
- 五、獻文帝
- 六、孝文帝

- 七、宣武帝
- 八、孝明帝
- 九、孝莊帝

四世 西魏 二十五年

- 一、孝武帝
- 二、文帝
- 三、帝欽

- 四、恭帝

一、孝靜帝 東魏 十七年

- 一、孝靜帝

高氏 北齊 五世二十八年

- 一、文宣帝
- 二、帝殷
- 三、孝昭帝

陳氏 五世三十二年

- 一、武帝 先
- 二、文帝
- 三、帝伯宗

- 四、宣帝
- 五、帝叔寶

五帝 後周 五世二十五年

- 一、孝愍帝
- 二、明帝
- 三、武帝

- 四、宣帝
- 五、靜帝

楊氏 三世三十七年

- 一、文帝 堅
- 二、煬帝
- 三、恭帝

李氏 二十世二百九十年

- 一、高祖 淵
- 二、太宗
- 三、高宗
- 四、中宗
- 五、睿宗

- 六、玄宗
- 七、肅宗
- 八、代宗
- 九、德宗
- 十、順宗

- 十一、憲宗
- 十二、穆宗
- 十三、敬宗
- 十四、文宗
- 十五、武宗

- 十六、宣宗
- 十七、懿宗
- 十八、僖宗
- 十九、昭宗
- 二十、哀帝

朱氏 二世十七年

- 一、太祖 全
- 二、末帝

李氏 四世十四年

- 一、莊宗 存
- 二、明宗
- 三、閔帝
- 四、帝從珂

- 後晉 石氏 二世十二年
- 一、高祖 敬 二、出帝
- 後漢 劉氏 二世四年
- 一、高祖 暹 二、隱帝
- 後周 郭氏 三世十年
- 一、太祖 威 二、世宗 三、恭帝
- 宋 趙氏 十八世三百二十年
- 一、太祖 匡 二、太宗 三、真宗 四、仁宗 五、英宗
- 六、神宗 七、哲宗 八、徽宗 九、欽宗 十、高宗
- 十一、孝宗 十二、光宗 十三、寧宗 十四、理宗 十五、度宗
- 十六、恭帝 十七、端宗 十八、帝昀
- 元 奇握温氏 十世八十八年
- 一、世祖 忽必 二、成宗 三、武宗 四、仁宗 五、英宗
- 六、泰定帝 七、明宗 八、文宗 九、寧宗 十、順帝
- 明 朱氏 二十世二百九十六年

- 一、太祖 瑛 二、惠帝 三、成祖 四、仁宗 五、宣宗
- 六、英宗 七、景帝 八、英宗(重) 九、憲宗 十、孝宗
- 十一、武宗 十二、世宗 十三、穆宗 十四、神宗 十五、光宗
- 十六、熹宗 十七、毅宗 十八、福王 十九、唐王 二十、桂王
- 清 愛親覺羅氏

(清朝の世系は、本書第七章の首に表示しあればこゝに畧す)

遼(契丹)の世系

耶律氏 九世二百九年

- 一、太祖 阿保 二、太宗 三、世宗 四、穆宗 五、景宗
- 六、聖宗 七、興宗 八、道宗 九、天祚帝

金(女)の世系

完顏氏 九世百二十年

- 一、太祖 阿骨打 二、太宗 三、熙宗 四、帝亮 五、世宗
- 六、章宗 七、帝允濟 八、宣宗 九、哀宗

### 朝鮮現時の王系

#### 李氏

- 一、太祖成桂
- 二、定宗
- 三、太宗
- 四、世宗
- 五、文宗
- 六、端宗
- 七、世祖
- 八、睿宗
- 九、成宗
- 十、燕山君
- 十一、中宗
- 十二、仁宗
- 十三、明宗
- 十四、宣祖
- 十五、光海君
- 十六、仁祖
- 十七、孝宗
- 十八、顯宗
- 十九、肅宗
- 二十、景宗
- 二十一、英宗
- 二十二、正宗
- 二十三、純祖
- 二十四、憲宗
- 二十五、哲宗
- 二十六、今王

### 安南現時の王系

#### 阮氏

- 一、嘉隆帝福映
- 二、明命帝
- 三、紹治帝
- 四、嗣德帝
- 五、得德帝
- 六、協和帝
- 七、建福帝
- 八、成泰帝

### 新編 東洋史教科書附錄終

明治三十二年十月三十日印刷  
 明治三十二年十一月九日發行

東洋史教科書

定價金六拾錢

校訂者 桑原隲藏

編纂者 開成館編輯所

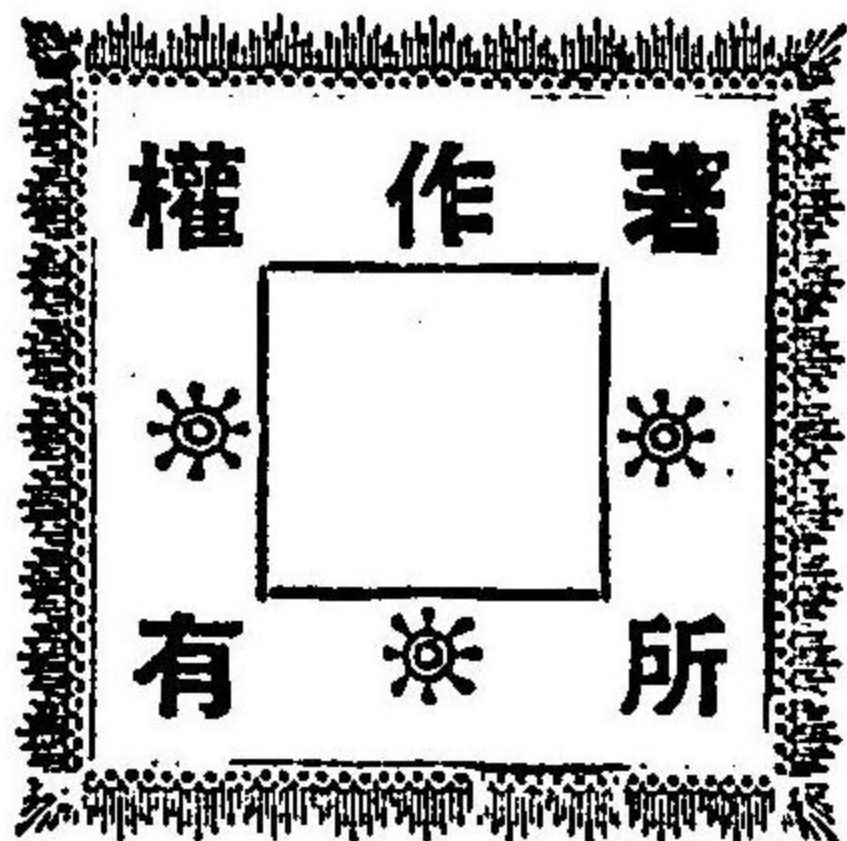
發行者 三木佐助

印刷者 野村宗十郎

印刷所 東京築地活版製造所

發行所 三木書店

大阪市中心齋橋通北久寶寺町角  
長距離 電話東八百七番



187  
79

## 中等教育歷史教科叢書

開成館編纂  
新編  
日本史教科書  
全壹冊 定價金六拾錢

開成館編纂  
日本史  
沿革地圖  
及  
繪畫集覽

開成館編纂  
新編  
東洋史教科書  
全壹冊 定價金六拾錢

開成館編纂  
東洋史  
沿革地圖  
及  
繪畫集覽

開成館編纂  
新編  
西洋史教科書  
全壹冊 定價未定近刊

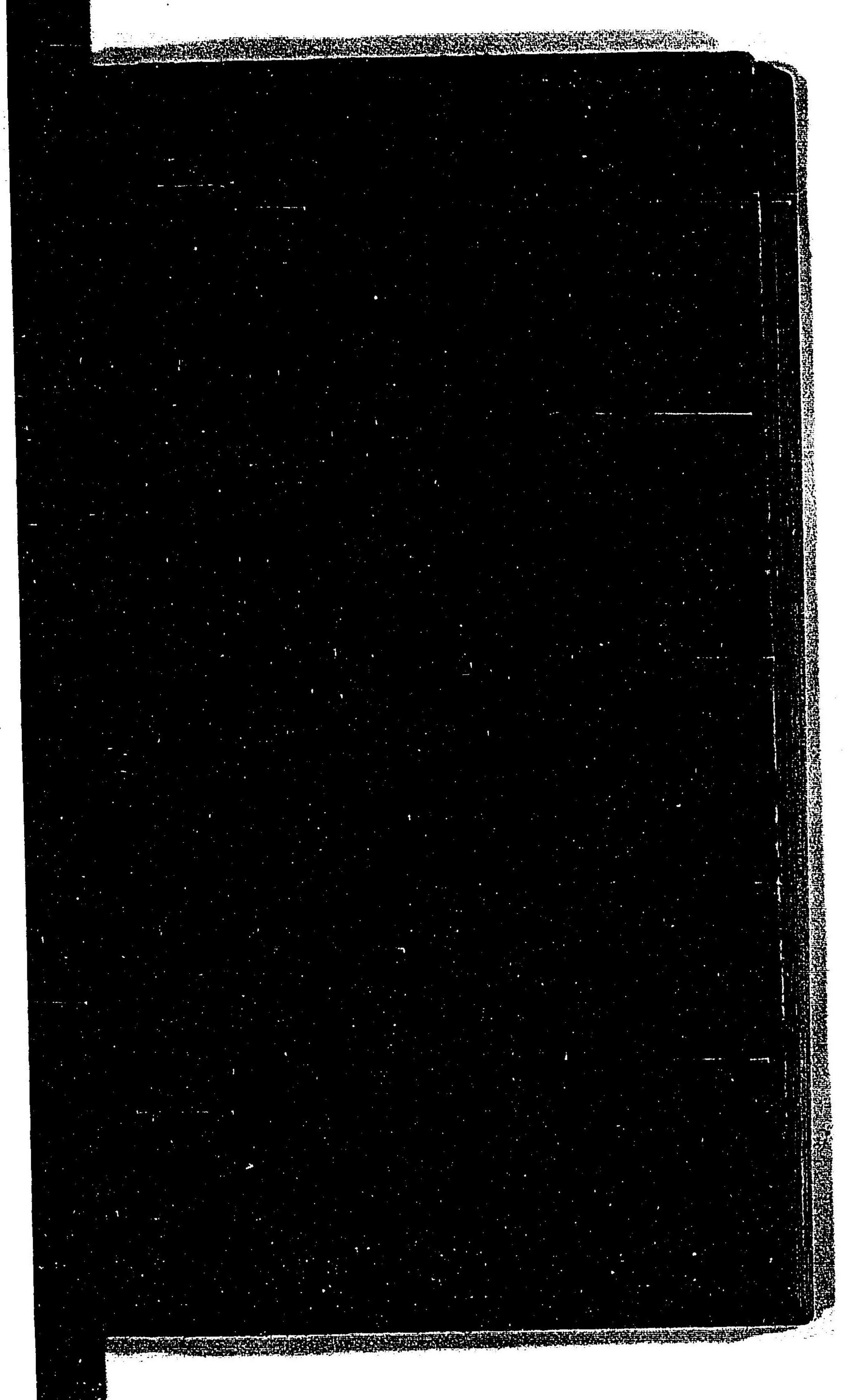
開成館編纂  
西洋史  
沿革地圖  
及  
繪畫集覽

開成館編纂  
高等  
日本史教科書  
中學五年級用

文學博士  
大槻文彥編  
增訂日本小史  
全貳冊 定價金六拾錢

187

79





003350-000-0

187-79

東洋史教科書

開成館編輯所 / 編

M32

ACC-1855

